2　黒または赤色を呈する石斧について

はじめに

柏木川13遺跡の石斧の材質分析を依頼した第四紀地質研究所の井上巌氏から、この黒い石斧（4）、（22）はどのようにして色をつけているのかと質問された。私はそれまでこの石斧をあまり注視しておらず黒い部分は石材の色だと判断していたため明快な説明ができなかった。確かによく見るとその黒はあたかも塗布されたかのように表面のみについており、欠損した断面部分はごく一般的な石材であるいわゆる「蛇紋岩」の石肌が見えていた。

この後､折に触れて類似品の収集に努めた｡縄文早期前半の資料として限定できる遺跡が望ましかったので、貝殻文土器の住居が多数検出された函館市中野Ｂ遺跡、芦別市滝里４遺跡を主にその対象とした。結果、報告書の写真図版からの判読ではあるが、類似すると思われる資料をいくつか見出だした。そこで実際に実物を実見し、さらに詳細に検討するため黒色に変化している部分を記録する作業を行った。比較・検討できたのは前出２遺跡と、浦幌町平和遺跡出土資料である。以下に図を用いその変化した部位についての詳細を説明する。図は報告書の図版から外形と稜線のみ再トレースし、実見した記録と写真を元に黒い部分と赤い部分を付記した。さらに縮尺を統一し大きさと色調を重視し並べてみた。グラデーションで表現した色調は、実際には石材自体の色調の差や光線の加減により客観的な判断はできないので、個々の遺物において石材となった石の色との違いを幾分強調して記録したものである。大きなものから１～３が大型、４～10、15～18が中型、11～14、19、20を小型と呼称し、21～28を石のみとした。29は擦り切り残片の例である。

事例１　中野Ｂ遺跡（１～３、５～７、11～17、19、20、23～29）

22点を確認した。１～３は比較的大型のものである。３点とも折損している。１、２は刃部以外の部分が黒色を呈するもので、１は折れた基部付近は風化しやや色が薄くなっている。２は刃部に赤みがかっている。３は基部のみ黒色を呈するもの。５、６は中型のもの。両者と刃部が欠けている。黒色に変化した部位は刃部周辺を除いた表面と側面。６は基部周辺と側面である。７、11～14は小型のもの。14はいわゆる石斧型垂飾。黒色部位も縁辺のみ黒い11や部分的な14を除いては刃部以外の部分が黒い。15～17は中型で黒色部位が他のものと違って異質なものである。15の黒色部位は両面の平坦部に部分的に認められるが裏面中央の平坦部に磨かれた部分は石材の色調が残る。16は擦り切り途中の溝内側が黒いもの。17は側面以外の両面にわたって赤色が広がっているが、背面基部付近がやや薄い。刃部左側が欠損し、割れた部分は赤色になっている。19、20は小型で赤色を呈するものである。刃部先端中央の両面が赤いことが共通するが、20は基部が黒い。これは濃い赤かもしれない。23～28はいわゆる石のみを一括した。23は黒一色のもの。表面はやや薄いが全体が黒色を呈する。24、26、29は赤一色、25、27は赤と黒を呈する部分があるもの。24、25は刃部の両面が赤いものである。25は刃部の石質に沿って筋状に赤色を呈する。刃部以外は黒色である。28は石斧全体が赤い。29は擦り切り残片で赤く変色しているもの。通常の擦り切り残片ではなく、原石面がないため２次的に加工されているとみられるものである。

遺構から出土したものは２（Ｈ－19）、３（Ｈ－21）13、15（Ｈ－100）その他は包含層から出土しており、１，５，11，17，20，24，29は平成４・５年度（北埋調報97）６，７，12，16，26，27は平成５・６年度（北埋調報108）14，19，23，25，28は平成７年度（北埋調報120）の調査である。

事例２　滝里４遺跡（８～10、18、21）

５点を確認した。８～10は中型の石斧である。８、９は刃部のみ原石の色が露出し、その他の部分は黒を呈している。18は基部の端部、側面の一部がやや黒く、その他の表裏両面が赤いものである。21は石のみ。刃部以外の先端部が黒色を呈する。８、10はＨ－10の出土資料、他は包含層から出土したものである。

事例３　平和遺跡（写真１）

滝里遺跡の資料を実見した折、長谷山隆博氏（芦別市教育委員会）からこの石斧に関連するのではないかとして浦幌町に同様な例があるとの教示を得た。

これは浦幌町平和遺跡出土の石斧で色調が明らかに赤と黒を呈するものである。この石斧は小型で、基部に穿孔がなされるいわゆる石斧型垂飾の一つであり、現在浦幌町立博物館に展示中のものである。

佐藤芳雄館長、後藤秀彦氏（浦幌町教育委員会）のご厚意により資料を実見、撮影させていただいた（右写真）。この石斧は刃部から体部中央にかけての面が赤く、側面、基部が黒いものでその境界が極めて明瞭なものである。変化部分を詳細に観察すると、黒い基部～側縁にかけては長くて深い直線状の擦痕が基軸と平行に残っているのに対し、赤い部分では基軸に対し横または斜めの短く浅い擦痕が残っていた。滝里４遺跡においても、黒色部分と原石部分に残る擦痕の方向が違っていることが認められる。

変化を検討して

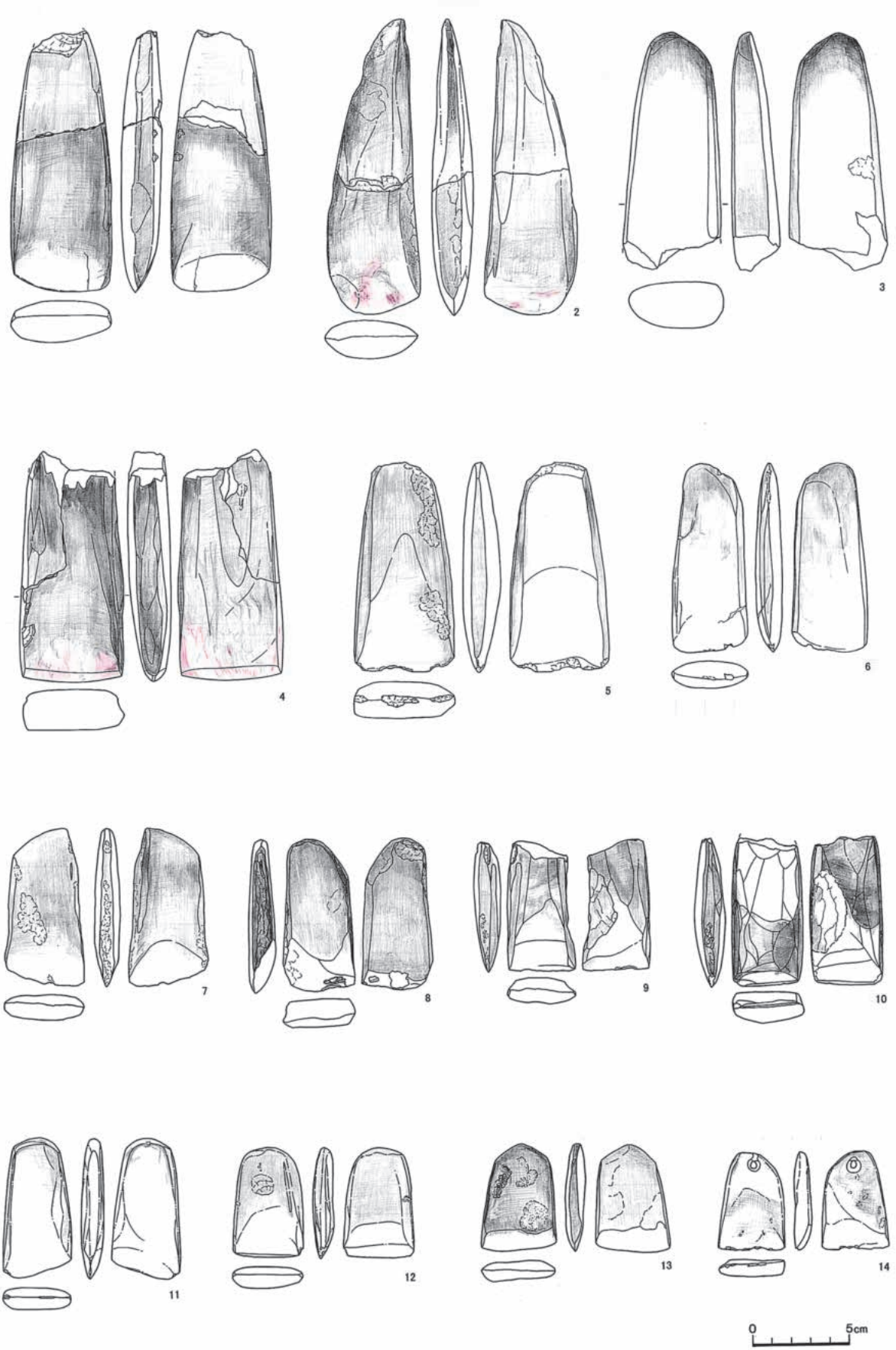
こうした石斧の色調について、函館市中野Ａ遺跡の平成３年度の報告書中で（北埋調報79　1991）担当者の西脇対名夫氏は、包含層から出土した石斧２点について「両側面と基部が黒ずんでいて他の部分とは明らかに異なる。おそらく着柄の痕跡であろうと思われる」とし、出土した石斧の中には「出土点数にして10点、疑わしいものまで含めると20点が火を受けて変色している。」ものがあるとしている。また同じく中野Ａ遺跡を報告した山原敏朗氏（現帯広百年記念館）もこうした黒いものが石斧に限られ、擦り切り残片や研磨石材にはほとんど色がついていないことから、おそらく製作工程に関わる焼成ではないかと予想していたという。これらを踏まえた上で、今回検討した３つの事例の観察結果から得られた結論は以下の４点である。

１　黒色部位のある石斧は中型から大型の石斧が多く、赤色また赤黒両色の部位のある石斧は中型以下のものが多い。

２　石のみ以外の黒色部位は刃部以外の基部、側面を中心とし、大型～小型にかけての石斧には刃部が黒くなるものはない。

３　赤色部位は、黒色部位とは逆に主に刃部を中心として認められる。

４　色調変化部位は稜線を境界としていることが多く、色調の境が調整方向の境である例が多い。



図Ⅶ－２－２　黒または赤色を呈する石斧（１）

おわりに

このように色調の変化が認められるものが、石斧関連遺物のなかでも石斧・石のみがほとんどであること。変化する部分が基部と側面に偏ること。また大きさによっても色調の使い分けがあることから、色調の変化は風化などの自然現象とは考えられない。加えて色調の変化が調整方法との密接なつながりを指摘できることから、着柄等の使用の痕跡である可能性も残るが、未製品に残る例（４）も考慮すればむしろ石材採取から完成までの製作工程上必要な作業の結果起こったものである可能性が高い。このことは後続する緑色泥岩製の石斧にこのような例が皆無であることを考えると、いわゆる「蛇紋岩」製に特有の作業であるということはできるであろう。

このように、縄文時代早期前半、貝殻文土器に伴ってこのような「赤・黒色に変化する石斧」があることがわかった。詳細は確認していないが、この石材による石斧は後の縄文時代早期後半まで残っているようである。今後更なる類例の検索とその出現と消長、また変化の原因と目的を調べていきたい。

（立田）

図Ⅶ－２－３　黒または赤色を呈する石斧（２）